

## 俘虜記 二〇三五日の残酷物語

三重県 葛巻 尊 勇

### 1 はじめに

私は平成十四（二〇〇二）年、財団法人全国強制抑留者協会三重県支部の一員に加えて頂いた者です。先日、以前同じ職場で親しくして頂いた支部役員林英夫氏より、抑留中の記事を書くようにとの依頼を受け筆を執ったのですが、帰国以来十五年、記憶も薄れ曖昧で不確かな記述になってしまいました。ご判読頂きますようお願い致します。

なお、『平和の礎』十三号を参照致しましたが、各執筆者が満州地区での軍隊生活、抑留中の苦勞等を詳述されておりますので、私は内容を少し変え、北方の一孤島での軍隊生活、抑留中の病院生活、洗脳教育等を中心に書いてみました。多少なりとも参考になれば幸いです。

### 2 五〇〇日の軍隊生活

私に「久居の歩兵連隊に入隊せよ」との召集令状が届けられたのは、昭和十九（一九四四）年二月初め、戦況は傾き、物資不足が目立つ窮乏生活の中に喘いでいた頃である。四月一日、今まで着ていた国民服を脱ぎ捨てて、生まれて初めて軍服を身にまとった。上着の折り返した襟の両端には、赤地に黄色い小さな星が一つ縫い付けてあった。陸軍歩兵二等兵の誕生であり、奈落の生活がこれから始まるうとしているのである。

六月下旬、一期の検閲の終わりを待つかのように俄かに「南方派遣軍『祭』師団補充要員として転属せよ」との転進命令が下るのである。（後にインパール作戦に出兵して殆どの者が戦死した）奇しくも私は同期の中隊員五十余人の内、二人と共に残留させられたのである。これが「生死の岐れ路」と言うのであろうか。

残留の私たちに北方派遣軍「憲」部隊への転属命令が下ったのは梅雨明けの七月中旬のころであ

る。先遣隊の一員として函館・小樽を経て根室に進駐。約二十日後、本隊の到着を待って根室より輸送船で約二時間、北海道とは指呼の間にある「志発島」に上陸したのが八月五日頃であつたらうか。

ところで、この志発島は「齒舞群島」の一孤島、当時は根室支庁の管轄で根室郡志発村と称していた。この島は一周しても僅か十五キロ、南北五キロ余り、円形のなだらかな島であり、中央には百米メートル余りの台地一面の芒が原、低地には湖沼が点在していた。土着の住民当時三百人程、その殆どが大正末期より昭和初期に北海道より、その一部は北陸路より入植したとのことである。

この島の海辺にはかなり上質の昆布が群生し、島民はこの昆布を採取して生計を立て、かなり裕福な暮らしをしていた。流水が解け始める頃、鱈・ほっけ・烏賊、「花咲蟹」と言う大型の蟹の漁獲が始まる。領海は島民を潤す宝庫であつた。「日魯漁業株」の蟹工場などもあつて、春ともなれば女工三百人程が内地より出稼ぎにやってくるまで全島が活

気を帯びるようになる。

島民は、四月下旬より始まり十月下旬に至る僅か半年間の漁獲で得た収入で豊かな生活をしていった。十一月になれば冬眠生活に入り、「ルンペン」と言う暖炉を囲んで濁酒ドロウを飲み博打に明け暮れの生活、僅か半年の稼ぎで一年間、豊かな生活のできるこの島はまさしく「宝島」である。

この齒舞群島には、水晶・多楽・勇留ユリ・秋勇留などの小さな島が点在し、近くには国後島、色丹島もあり、海辺一帯は魚介類・海産物島等無尽蔵の漁場である。これらの島々は日本人にとつてまさに垂涎の地であり、現在ロシアとの領土問題で大きく取り上げられているのもこんな理由によるもので、一日も早く領土問題が決着することは、以前この地に入植した島民にとっては最大の悲願であり、我々にとつても一大関心事である。一日も早い解決の朗報を待望するのである。

さて、この志発島上陸後は、小樽・根室の兵站基地より補充される食糧品、軍需物資、兵舎の建

築資材等の陸揚げ作業で忙しい毎日であった。ようやく一段落した八月下旬のことだったろうか、

「旅団本部の暗号教育隊に即刻入隊せよ」と。将校、下士官、兵併せて十人、色丹島・斜古丹に向するのである。この地で四十日余り、朝八時より夕五時まで、暗号実務講習・数字・暗号書・乱数表と首っ引きの長い一日であった。私にとつては、肉体労働という苦痛はなかったものの、単調でかなりしんどい作業であった。その反面、クイズを解くような楽しみもあった。この講習の教官は、私の実家と県境を挟んで隣村の滋賀県永源寺出身の中尉であり、また久居から同行した先遣副隊長松原中尉等と階級を越えた上官と次第に心易くなり、内地より一時間も長い秋の夜、カンテラの下での麻雀、将棋の相手をさせられて消灯近くまで楽しむ毎夜であった。

さて、この色丹島は北方四島で最も大きい択捉島の十分の一、国後島の三分の一にも満たない小さな島ではあるが、人口は当時千八百人と、四島

のうち人口密度の最も高い島でもあり、古くから移住民が定着したとのである。米は採れないが、島民が自給自足できる程の野菜も栽培していた。旅団本部のある斜古丹は島の中心地で郵便局（郵便局）もあり、またこの港は入江が深く漁船の停泊に適した港であった。周囲は山に囲まれ蝦夷松が群生し山麓には馬が放牧されていた。家犬を飼っている裕福な民家が点在し、時には大漁で沸き立ち大騒ぎする島民の姿が見かけられる賑やかな街であった。この豊かな島・街は今どうなっているのか。一日も早い本土復帰を念願するのである。

斜古丹島が冬の到来を告げるかのように忙しげに鳴き騒ぐ頃、暗号教育を終えて志発島に帰り、一週間の現場実習の後、実務に就く。班長中川軍曹以下七人、皆新米。一日約二十通余り、一通の暗号電報を解読するのに二時間近くも解けない事もあり、時にはホフシラ（解読不能）、打電先より突き返されたこともしばしばあった。

昭和二十年の正月も終え、沖に流氷の見え始め

る頃になってようやく一人前の暗号手となり、三交代の勤務であったが下番の時など時間を持て余す日が次第に多くなる。兵舎は漁師の納屋を改造した一軒屋で機密室になっており、副官・機密掛将校以外は入室禁止、時には夜勤明けの仮眠中と称して惰眠を貧ることもあった。班長は机上の仕事が不得手なのか検閲印を押す以外はすべて隊員任せ、時には魚屋へ出かけて美味しい魚を調達して振舞ってくれたりして家族同様、和気藹々の日暮らしである。一般の隊員が陣地構築・兵舎建設・物資の陸揚げ作業と苦役の連日であったのとは全く違った別天地である。

五月になり浜辺は昆布採取の島民で俄に活気づく。一方、不利な戦況を知らせる電報が日増しに多くなる。対岸に見える根室が空襲に見舞われ、米機が領海を偵察に飛来するようになり、静かな離島も次第に騒がしくなる。

ちようどその頃、ようやく兵舎も竣工、仮住まいの兵舎から移転し、落ち着いて暗号事務が執れ

るかと思つた矢先、南方各地での敗戦、沖縄の陥落と最悪のニュースが舞い込むようになる。一方、島内に駐屯する某中隊長が部下将校に発砲されたとの前代未聞の事件が勃発する。また某兵が島民の婦女を暴行したという知らせ、軍紀の乱れその極に達した。

八月九日早朝、ソ連軍の参戦を告げるウナ電が入る。ソ軍が満蒙国境を越えて乱入、一部のソ軍が間もなく択捉島にも上陸するであろうと、切ない電報が飛び込んでくる。「ポツダム宣言」を受諾したとの電報を副官に届けるのであるが、副官の手は震え顔が青ざめて見えた。この時の光景は今もなお私の脳裏から離れない。

八月十五日正午、全員舎前に集合して重大放送を聞く。詔勅の内容が雑音で十分に理解されなかったが、大隊長の「戦争は終わった。自後の命令を待つように。軽率妄動を慎め」と簡単な訓示で終わった。舎内に戻り班長を中心にあれこれと憶測話が飛び交い、ようやく敗戦の事実が解るよう

になり、かつて味わったことのない状況の中で虚脱感のみが五体を駆け巡った。時間とともに平常心を取り戻すようになり、煩わしいすべての軍務から解放され一刻も早く両親に会いたいとの思いが次第に募り始めるのである。

二十五日昼、ソ連兵数人がやにわに兵舎に入り込み「ダワイ、ダワイ」と騒ぎ立てる。隊長よりの「小銃その他の官給品、私物を整えて集合せよ」との命令で舎前に集まる。若いソ連兵によって武装解除、小銃・帯剣は取り上げられ一カ所に無造作に集積される。三八式歩兵銃に愛着があつてか涙を流す古兵もいたが、ようやく丸腰になった私は何の感動も湧かなかつた。「軍隊よさらば」と叫びたい気持ちになつていた。

ところで、この志発島に駐屯していた満一カ年間、暗号兵という特殊な任務に従事したこともあつてか、辛くて嫌な軍隊生活も経験せず、多くの懐かしい思い出を残してこの島と別れ、国後島の「白糠泊」に護送され、この地で着の身着のまま

の五泊の天幕生活。九月三日、「本日、我が部隊を解散する。以後はソ連側の命令に従うように」と部隊長の別れの訓示。直ちに護衛艦に守られた貨物輸送船の薄暗い船倉に総勢九百余人放り込まれる。船の進路先等知るすべもなかつたが、樺太の「大泊」港を出帆してからは、磁石はいつも「北」を指していた。国後島を出て幾日目のことであるうか、樺太「恵須取」の対岸、シベリア領ポトワニ港に錨を下ろす。一行は「約束が違う」と騒ぎ出すのであるが後の祭り、敗残兵の悲哀を今更のように感じ始め、嫌な予感が脳裏をよぎるのである。

### 3 一五三四日の抑留記

捕虜を満載した貨物列車は、四泊五日の間シベリアの原野をのろのろと走り続けていた。出発地の沿海州のポトワニの港で支給された僅かの携行食も底を突き始める。車内には便所もなく、二メートル程の高さの小窓まで担ぎ上げてもらい小

用を足す。時折駅の構内に停車し警備兵によって扉が開かれ、私達はやっとの思いで列車から飛び下りて線路に散らばって排便をするのであるが、時には中年の婦人どもが近寄って来て覗き込んだりして「ヤポンスキー、サムライ、ハラキリ」などとからかうのである。戦争末期のあの陸軍大臣の「死ストモ虜囚ノ辱メヲ受クルナカレ」とかの戦陣訓が脳裏をよぎり屈辱的だったが、私はそれよりも、戦争が終わり軍隊が潰えてしまった喜びの方がずっと大きかった。ナホトカの港には復員船が待っている。私は人いきれの充満する中で、もうすぐやってくる平和な生活に思いを馳せていたのである。

ところが列車は私達の予期に反して西進を続け、コムソモリスクの手前百キロ余りの「ムーリー」と言うさびれた村の線路脇にある収容所に停車して下車、収容所に放り込まれるのである。この収容所は以前、流刑された囚人達が収監されていたとかで、厳重な柵で囲み有刺鉄線が張り巡らされ

ている棟続きの一見粗末な平屋建てであったが、厳寒期にも耐えられるように建てられていた。部屋は三十畳位、両側には板張りの二段ベッド二列、六十人の寝室となる。六百人余りの捕虜はここに収容され、その日より残酷な抑留生活が始まるのである。

南京虫に嘯まれ風にあたられて夜も寝られず、六時、起床の鐘で叩き起されて、僅かに三百グラム一切れの黒パン、雑穀入りのスूप一杯で一日の労働が始まるのである。鋸・斧各々一丁を提げ、前後にマンドリン銃（ソ連式自動小銃）を肩にかけた十八、九歳の、未だ童顔が残っている若い警備兵に「ダワイ、ダワイ」とせきたてられて四キロ余りの山道を登る。峠付近にはから松・えぞ松・樅、それに白樺、直径八十センチ余りの大木から十センチにも満たない木、中には枯れ木、半枯れ等種々雑多の木が群生する雑木林に追い込まれ、ノルマに追われながらの伐採作業の連日である。

十月下旬、木の枝には氷の花が咲き、十一月末、

シベリア風に曝され零下三〇度の中、破れたぼろ衣をまとい、空腹と過酷な労働の明け暮れである。この地で最初の正月（昭和二十一年）を迎えた。春の遅いシベリアにもようやく雪解けの始まる頃、事故死・栄養失調死する者が日増しに多くなる。

五月になり採暖用の薪の需要も減るようになったのか伐採作業は一時中止、この収容所は閉鎖、抑留者は二分され、私達三百人は隣の収容所に移動することになる。久居入隊以来志発島、さらにこの収容所と、二年余日寝食を共にした同僚と後ろ髪を引かれる思いで別れ、富山県出身の抑留者と生活するようになる。

今までの伐採作業とは全く違った製材所の雑役夫となり、材木運搬、切り残しの木っ端の整理が主な仕事であった。不慣れな仕事であり、体力もめっきり衰え力も出ない。たどたどしい足取りで二人、三人がかりで用材を担ぎ上げるのであるが、痩せた肩に食い込んで無性に痛い。「ノルマを上げる」と騒ぎ立てる監督の甲高い怒声、難行苦行

の作業であった。

三カ月後のある日に左手の人指し指が急に痛み始め、一晚中疼き、まんじりともできないで一夜を明かし腕も腫れ上がっていた。翌朝の診断の結果「ひょう疽」とかで直ちに手術。勿論麻酔薬があるわけではないので「なま」の切開手術。激痛の余り一時失神状態。半日間ベッドに寝かされていた。今も左手人指し指の変形した爪を見る度にこの時のことを思い出すのである。この時の手術担当の富山市出身の軍医中尉の肝煎りで舎内勤務に就くようにと手配されるのである。

ところで、入所当初から生水を飲むことは厳禁され、ラーゲリ内に「湯沸所」を設置して常時湯茶が用意されていた。私はこの湯沸所に勤務することになり、朝三時起きて五百リットル余りの水を入れる大釜に火をつけるのである。朝の湯茶補給も終わり、舎内殆どの者が作業に出かけラーゲリ内がひっそり静まり返る頃、釜の横でごろ寝をしてしばし仮眠をとるのである。午後は釜焚き

用の薪割り、四時頃より夕食用の湯沸しと、すべての作業が終わるのが夜の八時過ぎ、これが私のノルマのない一日の作業であった。寒風吹き荒む屋外で、空腹とノルマにさいなまれる激しくて辛い肉体労働から解放されようやくこの体に適った仕事を与えられ、またこの湯沸所が炊事場の隣にあつたので、食事も炊事場からの直接給与となり、栄養失調症も日増しに恢復し始める。

昭和二十二年、抑留二回目の正月を迎える。雪降りの日が続いていた。三寒四温、多少暖かく感じる日もあつたが、横降りの粉雪が毎日のように降り積もっていた。零下三〇度以下になれば野外作業は一時中止されることもあつたが、湯沸し勤務の私には逆に沸騰まで長い時間を要するようになる。

そんな頃、一日二回、五キロも離れた川より水を馬桶で運搬してくれた同僚が、雪上車の運転を誤ったのか事故を起こし、発見が遅れ凍死したとの知らせ。毎日二回、顔を合わせ親しくしていた

友の悲惨なこのニュースは、私にとって最大のショックな事件であつた。

この頃、「日本新聞」が配布されるようになる。この新聞の報道によって母国の状況が少しずつ分かるようになるが、一方、ソ連が指導する洗脳を意図するもので、資本主義の追及、天皇制の打倒、軍国主義者の追放、更には共産主義による楽土建設等の啓蒙宣伝を目的とする記事が大半であつた。それでも活字に飢えた私達は、全く閉ざされた内地の情報を知ろうと貪り読んだのである。

雪解けの始まる四月、このラーゲリにも「ダモイ」の知らせが届くようになる。一次選抜者は作業優秀者と「オカー」と格付けされた虚弱者とのことである。第一次ダモイ組十余人の中に、久居入隊以来お世話になつた伊藤曹長も加わっていた。この人達を見送ると同時に、この一行、果たして故郷の土が踏めるのであろうかと疑念を抱きながらも、一層望郷の思いが募るのである。でも、私はそのから二年余り抑留を強いられるのである。



六月、この収容所が閉鎖される。昨年（二十一年）五月入所してより一年余りの間のでき事を残して、東へ五キロの田舎町ムーリーの郊外にある収容所に全員が移動することになる。今まで舎内勤務であった殆どの者は解任させられて一般作業員となり、二十余人の作業班を編成して道路工事・住宅地の整備・水道敷設工事等の労役に就く。体力が恢復していた私にとって、伐採作業と違ってそれ程苦痛だとは思わなかった。それに、この作業班はいつもノルマは一三〇%以上の成績を挙げ「ハラシヨラボーター」の表彰を受けたこともあり、黒パンも少し大きくなっていった。

建設中の住宅も私達の労役によってほぼ完成し町らしくなった八月、この収容所もまた閉鎖され、僅か二カ月で再び移動することになる。

この地ムーリー地区の収容所を出た総勢六百人は台車に乗せられ、コムソモリスクを経て西進、イズベストコーワヤを通り支線ムヤ鉄道を北進、ウルガルに向かう。今日で幾日目の旅であったの

か。七、八百キロの間、台車での輸送であったが、ソ連兵の厳しい監視もなく、八月中旬の頃で暑さ寒さもそれ程感じない予想外の楽な旅であった。

終着地ウルガルに程近い所で、後部車両三台に分乗していた百人は突然下車を命令され、そのまま近くの収容所に放り込まれる。このラーゲリには、一週間前に入所した二百人、その中には戦犯者・反動分子と烙印を押された人たちもいると聞く。

ここでの私の仕事はラーゲリ内の清掃、衛兵所の掃除、所長官舎の雑役、便所掃除であった。トイレ掃除は嫌な仕事ではあるが、作業隊のする鉄道工事という重労働のことを思えば我慢できるのである。

十月になり収容所長が突然やってきて私に「イズベストコーワヤへ行き共産教育を受講せよ」と告げられる。私にとってまさに晴天の霹靂のでき事である。なぜ私が受講者に選ばれたのか。教育の内容その他皆目不明、一瞬戸惑ったのであるが、

拒絶することは勿論許されないことであり、内心不承不承ではあったが承諾するのである。ウルガル地区の他の収容所から選ばれた四人と共に、入ソ以来初めて体験する監視兵もない客車で寛いだ旅、車窓には白く薄化粧をした白樺林が見え隠れしていた。

イズベストコーワヤの街はずれにあるラーゲリの講習会場で、三十余人の受講生と共に洗脳教育の生活が始まるのである。

朝八時より夕方五時までの講義、講師はハバロフスクの地方教育を終えた三人、中には少年開拓団出身とかの二十歳位の若い講師もいた。講義内容は、マルクス・レーニン主義、ソ連共産党史、日本共産党史等の講義で、すべて日本語で書かれたソ連発行のテキスト。中には「小党史」と称した分厚い立派な冊子もあった。これらのテキストの輪読、講師の要約、問題提起による討論会、ベセーダ(テスト)も度々あった。時には政治部将校が訪れ流暢な日本語で講義したこともあった。

夕食後二時間、自己批判・相互批判と称した反省会が催される。この席では各自、今日一日の反省、今までの行動、軍隊時代の出来事、青少年期の事、果ては家業、出身階層の事等を各自発表する。発言の中に共産思想に反する言動があれば取り上げ、徹底的に究明する洗脳教育が行われた。今時の語で言うマインドコントロールである。

ところで、私の実家は自作農家で、茶業、養蚕業を副業として生計を立てていたが、両親が私の将来の事を配慮してか、つてを求めて名古屋の有名寺の後継者として十歳の頃に預けられ、この寺で養育されたのである。

さて、共産主義社会で排除する階層は財閥、地主、官憲、警察官、それに僧侶である。私は寺うちで僧籍もあったが、この事実を隠して農家出身と称していた。もしこの事が発覚すれば、この反省会の席で「吊るし上げられる」と懸念し続け、肉体的疲労に代わり心理的恐怖と闘わなければならなかった。

こんな頃、栄養失調症と靴擦れが原因で足の付け根のリンパ腺が酷く腫れ、近くの病院に入院。若い女医の一日二回の診察以外はベッドに横たわる退屈な闘病生活が二カ月続く。厳寒期も終え日差しもようやく春めく頃退院。棟続きの部屋に移されて、一日二、三時間の軽作業以外は病後の療養生活。抑留されて三年半、ようやく人間として最低の生活ができるようになった。

当時、この収容所は民主化活動が活発に行われていた。各部屋には一、二人のアクチーブなる者が同居し、私達の言動監視役に当たり、夜になると二時間程の夜間授業を開講して出席を強要していた。授業内容は、月二回発行される「日本新聞」の記事をテキストとした講義。この新聞を担当していた「シベリア天皇」こと本名「浅原正基」（あさはらしょうき）、ペンネーム「諸戸文夫」（もろとふみお）と称する人物の取次ぎの講義であった。私はこの夜間授業には体調不良を口実に殆ど出席しなかった。いずれ反動分子・日和見主義者と

して吊るし上げられるであろうと覚悟はしていた。昭和二十三年五月、病氣も完治しイズベストコフワヤに帰り再び地区講習を受けるのであるが、前回の講習生は修了して新顔の者が受講していた。講師も一人を除き新任講師であり、終講に近いころであった。二十日余りで終講、再びウルガルの収容所へ送還されたのである。

反動分子の多いこのラーゲリでは民主化運動が緒に就いたばかりで、前回の講習会で席を同じくした同志が委員長をしていた。彼は満蒙開拓団義勇軍出身で、早くから共産主義を信奉する積極分子である。早速私に委員会に籍を置き生活部長をするよう命じたのである。私にとつて不本意ではあるが、地区講習修了者であるので止むなく受諾する。その頃毎晩のように大衆集会を開き、反動分子とマークした者を呼び出して前歴を暴き、日々の行動をチェックして吊るし上げた。被害者は年配の者・下士官が多かった。主催者側であった私はこの時の事を思い出すと今も胸が疼く。

ここでの私の作業は技術少尉の測量の助手、収容所前を走る鉄道が敷設され線路の土盛り、側溝工事、保線作業の進捗状況を調べる測量である。

測量器具の運搬、杭打ちが主な仕事で、午後三時には測量も終わり少尉はおらなくなる。助手仲間と「ヤクルト」とかの「ぐみ」に似た木の実や野菜を採って食べ、終了時間まで過ごす。この少尉は新婚で、土曜日になるとウルガルの街へ出かけダンスをして一夜を明かすのであるが、付近は泥棒が出没するとかでいつも私に留守番を言い付けて出かける。他国の捕虜に自国の泥棒の見張りをさせるとはなんとも奇妙な話である。

十一月、雪が積もり凍結するとこの仕事も一時中止。助手二人、この少尉に連れられてウルガルの駅近くにある収容所に転送される。ここでは駅前の新築住宅周辺を測量するのであるが、この技師は民間人で、今までと違って仕事にうるさい年配者であった。仕事が終われば自宅の雑役に使われ薪割りまでさせられた。この街も私たち抑留者

によって立派に整備され新興住宅地となる。

昭和二十四年五月になりこの収容所も閉鎖され、全員、ハバロフスク百五十キロ西のピロビジャンの小高い丘にある新しい収容所に移される。南京虫に悩まされることのない明るい宿舎で、今までと違って住み心地の良いラーゲリであった。私はくされ縁で自主運営委員会の委員となり情報宣伝部長を担当するよう選出されるが、ラーゲリ内の勤務を断り一般作業員となる。主な仕事はセメント工場の雑役。粉塵の中の仕事であったが、重労働ではなかった。時には夜中起きてセメントの貨車積み。作業はかなりきつかったが翌日は休業日で、ノルマに追い立てられた今までの作業と違い、それ程苦役とは思わなかった。

休日を利用して壁新聞の旬報を編集する。この新聞はアジ（扇動）を目的とした宣伝活動で「赤旗の下へ」、「軍国主義撲滅」、「スターリン万歳」のスローガンを書くのであるが、私は時々「日の丸の下へ」、「赤化運動排斥」、「天皇陛下万歳」な

どと、戦前の雄叫びを想起したりして釈然としなかった。もしこんな事を口にしたら反動分子として完全に葬り去られたであろう。

八月（昭和二十四年）になり「ダモイ」のかなり確度の高い噂が飛び始める。日本新聞にも帰還の詳報が掲載されるようになる。そんなころ收容所長が「帰還命令が出た」と伝達し、「事故で怪我をすることがないよう充分注意せよ」と懇切に訓示する。

#### 4 帰還の路の

自活に必要な仕事を除き作業命令はなかった。帰還用の衣服も支給され、十月初旬、この收容所と別れ貨車に乗せられナホトカへと最後の旅を続けるのである。「帰心矢のとき」私達にはなんとろい貨車。何日間走ったであろうか、十月二十日頃、ようやくナホトカへ辿り着く。この街は帰還者でごった返していた。港の見える收容所で一週間程滞在する。ここでのアクチーブの活動は一

層激しさを増した。私は唯呆然と立ちすくむばかりだった。ラーゲリ全体が朝から番まで「赤旗の歌」、「インターナショナル」を声を嗶らして歌い続けていた。やむなく私も一員となり「屍、死屍、血潮、いざ戦わん」と戦鬪的な歌詞を大声で歌い続けた。それもほろ苦い思い出の一齣である。

昭和二十四年十月二十九日、乗船を拒否されるのではないかと薄氷を踏む思いで帰還船に乗る。甲板では歌声とともに「偉大なるスターリン万歳」、「祖国ソビエトさようなら」と叫び立てる中、船は埠頭を離れ、私はようやく船室で落ち着き故郷の思いに耽っていた。突然アクチーブと称する若い二、三人の連中がやってきて、共産党に入党を誓約するように、三重県代表者になって全員に入党を勧誘するようにと強硬に申し出てきた。私は学生時代にかじったヘーゲルの「弁証法」を論拠として、共産主義社会が最高の社会ではない、歴史過程の中での一社会にすぎないと理屈攻めして申し出を断った。再度やってきたが、船酔いに

託<sup>かこつ</sup>けて面会を拒絶する。二日目の朝、舞鶴湾に入るや、松のかぐわしい香の漂う清しい朝日に迎えられる。舞鶴港岸壁に着く。甲板では「天皇島へ敵前上陸だ。いざ闘わん」、「全員、代々木（共産党本部）へ直行せよ」と口々にわめき立てる一派もいた。これ程までに洗脳され、共産主義を礼賛する者がおることに改めて驚異を感じた。下船が始まる。棧橋を囲んで出迎える人垣、プラカードを持った人の列、消息不明の抑留者名を書いた幟の波でこつた返していた。沿道に並んで待つ、ちよつと老け込み一際小さくなった父の顔を見付け涙の対面、妹婿との初対面、DDT粉末の洗礼を受けようやく宿舎に入る。二日間にわたる復員手続き・健康診断・米側の思想調査・支給品の受領も終え、国敗れても変わらぬ山河に囲まれた駅前で、出征時に倍する出迎えの人々の歓迎を受け、五年八カ月目、懐かしい我が家の敷居を跨いだのは昭和二十四年十一月三日、夕日が西の山に沈む頃であった。

年末、日本共産党支部役員と称する三人が来訪し入党を勧誘するが固辞する。新年早々、再度の訪問を受けるが四年半の抑留生活から得た体験から、党に対する不信・矛盾・疑問等列挙し、再び入党を固辞する。その後は何も音沙汰がなかった。

昭和二十五年三月末、三重県高等学校教員に採用され、四月より教員となつて第二の人生を歩む事になつたのである。

#### 【執筆者の紹介】

平成十四年十一月十九日、三重県四日市市で開催された「シベリア抑留の労苦を語り継ぐ集い」の会場で、葛巻尊勇氏と数十年ぶりに顔を合わせました。かつて職場を共にした同僚、収容所こそ違え、共にソ連抑留生活の労苦を味わつた私たちにとってはまさしく奇遇でありました。このたび艱苦に満ちた強制労働のみならず、病苦との闘い、根室とは指呼の間にある齒舞諸島の主島・志発島

(根室郡志発村)の駐屯地から国後島、樺太を経て極東シベリアの収容所を転々とした末、昭和二十四年十一月三日に帰還された四年三月の間の数奇な道筋を手記にされました。ここに氏の関係略歴のみご紹介申し上げます。

現住所 三重県いなべ市大安町丹生川

大正十年十月一日 三重県員弁郡丹生川村にて出生

昭和六年八月 名古屋市東区(現千種区)城山町に転住

に転住

同十四年三月 旧制中学校卒業

同十八年九月 旧制大学文学部繰上げ卒業

同年 十月 家業従事

同十九年四月 歩兵中部第三八部隊入隊(三重・久居)

久居

同年七月 北方派遣軍憲部隊転属(歯舞・志発島)

同年八月 暗号教育受講のため色丹島旅団本部出向、修了後原隊復帰、暗号実務を執る

同二十年八月 ソ軍により武装解除、志発島より

国後島、樺太、沿海洲ポートワニ

港を経てムーリー収容所、伐採・

製材所・湯沸し作業

同二十二年八月 ウルガル収容所 雑役

同年十月 イズベスコークワヤ収容所、地区講習

受講、病氣入院療養

同二十三年六月 ウルガル収容所 測量助手

同二十四年五月 ビロビジャン収容所 セメント

工場雑役、壁新聞等製作

同年十月 ナホトカ収容所

同年十一月三日 帰還(三重県員弁郡大安町丹生川中の自宅へ)

川中の自宅へ)

同二十五年四月一日 三重県立高等学校教員に採用

用 四日市高等学校・桑名

西高等学校・桑名高等学校

等勤務

同五十八年三月 定年退職

平成十四年八月二十三日〜二十七日

日本人墓地慰霊団に参加  
(ハバロフスク・パルチザンスク・ウラジワスト  
ツク・ナホトカ展墓)

(三重県 林 英夫)

## 第二次世界大戦回顧

滋賀県 吉田 貞次

昭和十二(一九三七)年七月七日、北支の一端  
盧溝橋で勃発した事件で支那事変となり、大東亜  
戦争、第二次世界大戦ともなりました。支那事変  
当時は野洲尋常高等小学校高等科二年生でした。  
八月上旬、野洲町で在郷軍人中五人に召集令状が  
届きました。

支那事変も刻々と激戦となり、八月末には野洲  
町で五十人程度が召集令状で出征をされました。  
続いて九月、十月と召集令状により出征をされま  
した。十二月十三日、当時支那の首都南京陥落。  
日本では昼は旗行列、夜は提灯行列、仮装行列と、  
陥落祝賀行事が全国各地で催されました。

翌年五月十九日には徐州陥落と、当時五カ月六  
日、祝したものでした。九月には大別山が陥落し  
ましたが、京都部隊の第十六師団従軍で、野洲町